

『憎悪の樹——アングロ VS イスパノ・アメリカ——』

フィリップ・ウェイン・パウエル著、西澤龍生・竹田篤司訳、論創社、一九九五年

横山 玲子

はじめに

一五世紀に始まる大航海時代以降、ヨーロッパは地球上のあらゆる地域へ拡大し、近代社会へと至る発展の中心的役割を果たしてきた。世界各地に植民地を建設したヨーロッパ諸国は、政治、経済、宗教、イデオロギーなどさまざまな局面において互いに反目と協調とを繰り返しながら、結果的には「啓蒙」という作業を通して、ヨーロッパ文明と呼ばれるひとつの文明の種子を世界中に播いたのである。一九四五年八月、第二次世界大戦の終結はそれまでのヨーロッパ社会のあり方を一変させた。ドイツの東西分割に伴い、民主・資本主義を唱える西側陣営と、社会・共産主義を唱える東側陣営とに分断されたのである。大戦によって疲弊したヨーロッパ諸国に代わって西側陣営の指導的立場に立ったのは、かつてヨーロッパが植民地として獲得した、まさにその領土を基

盤として独立した、アメリカ合衆国であった。東西両陣営の競合は、植民地支配から脱却したラテン・アメリカ、アジア、アフリカ諸国など、非ヨーロッパの国々を巻き込みながら決着のつかないまま泥沼化していった。しかし一九八五年、ゴルバチョフ大統領のもと、ソビエト連邦でペレストロイカが開始されると、一九九〇年には旧東ドイツ、チェコ・スロヴァキアなどの国々が相次いで自由選挙による新体制を確立し、東西ドイツが統一されるに至って世界を二分する東西の冷戦は終結を迎えた。ソビエト連邦は解体し、資本主義経済への参入も困難なまま旧東欧諸国の内紛の時代へと突入したのである。

本書は、一九八五年、冷戦がまさに終結しようとしていたときに、西欧文明の死活に関わる問題を訴えて出版された。パウエル氏は、ヨーロッパ諸国に代わって世界の主導権を握った合衆国が、超大国として揺るぎない地位にあるにも拘らず、東側陣営に対し

攻撃されやすい「裂け目」をもち続けていることを憂慮している。この「裂け目」とは、ヨーロッパ大陸において古くから形成され蓄積されてきた、反スペイン感情が作りだしたアングロ世界とヒスパニック世界との対立である。氏は、アングロ世界に根強く蔓延する偏見を正し、ヒスパニック世界も実は西欧文明の一員であることを再認識しなければ、西欧文明の存続は困難なものとなることを指摘しているのである。

ソビエト連邦の解体に伴い、唯一の超大国となった合衆国のあり方に関して、近年さまざまな論議がなされている。中でも、サミュエル・ハンチントン氏が著した「文明の衝突」⁽¹⁾は、日本や西欧文明社会で大きく取り上げられた。ハンチントン氏の描く対立構造は、もっぱら西欧文明に対する敵としてのイスラム・儒教文明の存在を強調するものであり、西欧文明の危機は、外側にある非西欧文明との対立によって生じるといって考へに基づいているように思われる。⁽²⁾しかし、西欧文明の抱えている危機は、果たして西欧文明の外にある脅威によってのみもたらされるのであろうか。本書においてパウエル氏が示した対立構造は、西欧文明内における西欧と非西欧との対立であり、それこそが西欧文明の危機を生みだす大きな要因であることを指摘している。西欧文明の中に築き上げられた対立構造を、起源と成長の過程から根本的に見直すうとすることによって、西欧文明存亡の危機を乗り越えようとするのである。

本稿では、現代文明をどう考えるべきかという視点に立って、

まず、パウエル氏の著した『憎悪の樹』を紹介する。本書は四〇〇頁に及ぶ大著であり、その内容すべてに言及することはできないが、各部分とにそのあらましをまとめることとする。その後、もう一度ハンチントン氏の現代理解と対比しながら、パウエル氏の論議の意味を問いたい。

概要

序論

パウエル氏は、アメリカ合衆国が世界を二分する超大国のひとつであり、西側世界の防衛と発展途上国への援助というふたつの責務を背負わされていること、さらに、合衆国を破壊しようとする地球規模のプロパガンダによって、さまざまな攻撃を受けていることを重視する。合衆国の立場が、かつて近代における最初の覇権国家を形成し、一世紀半にわたって地球規模の大国であり続けたスペイン帝国とよく似ていることを危惧するのである。氏によれば、スペイン帝国は、発展途上国指導のための「白人の責務」を引き受けなければならず、同時にユーラシア大陸の異教徒の襲撃からキリスト教世界を守らなければならない立場にあった。スペイン帝国の勢威は、イギリスやフランスなどヨーロッパ諸国の中に恐怖と羨望、憎悪を植え付け、スペイン支配が敗退するに至って、ついにスペインはヨーロッパにありながら、ヨーロッパ社会から異端扱いされることになったと言う。パウエル氏は、合衆国が超大国であることにあぐらをかき、尊大な態度を改めず、ヒ

スパニック世界（イベリア半島およびラテン・アメリカ諸国）との間に生じている軋みの本質を理解せずにいるならば、合衆国率いる西欧文明はかつてのスペイン帝国同様、決定的な打撃を受けることになるだろうと指摘しているのである。

第一部 「黒の伝説」のデイモンジョン

「アングロ（英語圏）」「ヒスパニック（スペイン語とポルトガル語圏）」両世界は、西欧文明最大の言語・文化的柱であるにも拘らず、互いに反ヒスパニック（イスパノフォビア）、反アングロ（ヤンキーフォビア）感情をもっている。後者は、特に二〇世紀における合衆国によるカリブ海、中米諸国への軍事・外交的干渉によって加速度化したものである。一方前者は、イギリスなどヨーロッパ諸国に端を発した先祖伝来の文化的偏見であり、地中海地域の諸民族とその子孫たちを卑小化・矮小化する「北ヨーロッパ人的優越感」を永遠化したものであると言う。このような「北ヨーロッパ人的優越感」がヨーロッパにおいて決定的になったのはなぜだろうか。パウエル氏は、スペインが軍事・王朝・宗教・経済の領域においてヨーロッパの頂点の座に長く君臨したこと（一五〇〇年～一六五〇年）から生じた、反スペイン偏見、プロバガンダ、憎悪などの集積がその根底にあったのだと言う。さらに、一六世紀に新大陸へ渡った修道士バルトロメ・デ・ラス・カサスが、スペイン人による原住民の迫害・掠奪を本国スペインへ訴える目的で著した『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』³が、反ス

ペイン活動の恰好の材料として用いられたことを強調している。力においてスペインに劣勢であった、オランダ、ドイツ諸邦、フランス、イタリア、イギリスおよびユダヤ人は、当時普及した活版印刷術を利用してヨーロッパ中にイスパノフォビアを伝播させたのである。スペイン人に対する、金探し、残忍、不寛容、非人間性というプロバガンダは、反スペインの偏見に基づいたナショナリズムを培い、これらの国々において愛国的文学や歴史として確立されるに至った。同時にこのナショナリズムはプロテスタントの反乱とも結びつき、宗教活動においても定着したと言う。しかし、一六世紀のヨーロッパでは、残忍、不寛容、非人間性があったところに存在していたのであり、むしろこれがヨーロッパ大陸の社会、宗教、経済的生活の特徴であったことを考えなければならぬことを、パウエル氏は強調するのである。博愛主義は、人間の諸関係において未だ潜在的であり、未発達であり、ひとりスペインだけがこのような烙印をおされなければならなかったのはもっぱらスペインに対する怨念に基づくものだと氏は指摘している。

第二部 「伝説」の成長

イスパノフォビアはいかにしてヨーロッパ社会で形成されたのか。この問題は、合衆国が現在おかれている状況を分析するために極めて重要である。パウエル氏は、イタリア、ドイツ、フランスとユダヤ人における反スペイン感情の形成を詳細に記述してい

る。一三世紀後半から一五世紀を通して地中海各地がスペインの支配下におかれたことは、自らをローマの嗣子として他の全ての民族に優越すると考えていたイタリア人の感情を逆撫でした。支配権を失ったイタリアの貴族・知識階級は容赦なくスペインを批判するに至ったと言うのである。一方ドイツでは、反ユダヤ感情が反スペイン感情へと拡大していった。一五・一六世紀のドイツでは、スペインによるユダヤ・イスラム人に対する寛容が嫌悪され、キリスト教の分裂とイタリアの影響がこれに拍車をかけたのだとパウエル氏は述べる。イタリアの影響とは、ドイツが文化の後進国であり野蛮人種であるとする偏見であり、ドイツの人文主義者たちはこれに反発し、カトリックという点において共通していたイタリアとスペインとを激しく攻撃することになったのである。氏は、ドイツのナシヨナリズムはその発生時において、なかば反スペイン・プロパガンダに基づいていたと考えている。スペイン人の肌の浅黒さを言い立て、そのユダヤ性を強調し、イタリアやトルコと結びつけて劣等民族であるとするドイツ人による偏見は、オランダのプロバガンダによって強調され、「黒の伝説」の発展に拍車をかけることになった。オランダ人は、繰り返し、スペイン人をマラーノ⁽⁴⁾と記述したのである。

一三世紀末から、イギリスおよびフランスで行われたユダヤ人の追放によって、スペインには多くのユダヤ人が流入し、一五世紀のスペイン国内では政治・宗教・経済においてユダヤ人が大きな役割を果たすに至った。パウエル氏は、「陳腐なパラレルだが」

としながら、今日合衆国におけるユダヤ人の強力な文化・政治・商業上の影響に対する、外国人の批判の目と、当時のスペインに對するイギリス、オランダ、フランスおよび教皇庁による人種的・宗教的反感との類似性を示唆している。表面的にはキリスト教に改宗しながら、実はユダヤ教の信仰を捨てずにいる隠れユダヤ教徒が存在し、彼らがスペイン国内において重要なポストに就いていたことから、一四八〇年、スペインは国内における異端審問を開始した。カステイリャ異端審問の目的は、スペイン国内におけるユダヤ人による国家内国家形成の可能性を除去することにあつた。一四八〇年代末期、ユダヤ人とイスラム教徒の親和力はスペインにとって脅威となる。グラナダの陥落後に想定されるイスラムによる再侵略の際に、スペイン国内のユダヤ人がイスラムの協力者となることを恐れたイサベル女王は、一四九二年、キリスト教徒として洗礼することを拒否したユダヤ人すべての追放命令を下した。これによって、ユダヤ人の間に強力なイスパノフォビアが生みだされたと考えられる。彼らの多くは、イタリア、イスラム圏、ネーデルラント、ドイツ、フランスなど、反スペイン・プロバガンダを唱える地域へ移動し、急成長する活版印刷業に關わることで、強力なスペイン批判活動を繰り広げるに至った。

活版印刷物による反スペイン運動は、主にオランダとイギリスにおいて激化した。一五八〇年にオランイエ（オレンジ）公が、彼を反逆者として追放したフェリーペに對する抗弁書『弁明』を

出版したことから、反スペイン・反カトリック・プロバガンダは深く一般のプロテスタントの伝統の中に定着した。プロテスタント対カトリック、北ヨーロッパ人対スペイン人という対立において、反スペイン勢力は圧政に刃向かう自由の守護者となったのである。また、一四六〇年以降、イギリスで発展したプロテスタントの特徴は、強烈な国家主義的愛国心、海外帝国の勃興、国民文学として表れ、スペイン独占に対する挑戦として海外植民と密接に連携することになる。特に、一五八三年における英語版『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』の出版は、明らかに反スペイン感情を煽ることを目的としていた。イギリスは、これまでスペイン帝国に対して抱いていた嫉妬と羨望を、スペイン無敵艦隊の敗北やラス・カサスの著書を利用することで、スペイン人を卑劣で無能な臆病者とする優越感へと転換したのである。一五九八年、フランクフルトで出版された『簡潔な報告』には、一七枚の彫版画が含まれていた。スペイン人がインディオに加えたたとされる呵責と殺戮の場面を、ラス・カサスの叙述に合わせて描いたものである。以後、『簡潔な報告』は、スペイン人の身の毛もよだつ残虐行為を伝える代表的な書物として、怖いもの見たさの大衆の中へより深く浸透していくことになった。⁵⁾『簡潔な報告』は、一六世紀末から一八世紀中葉までの間に、オランダ語、英語、フランス語など合わせて三四版を重ねた。ラス・カサスの諸著書を利用して作り上げられた「黒の伝説」は、あたかもそれが真実であるかのごとく、歴史書物のなかに書き込まれたのである。一七世紀

以降、かつてヨーロッパの指導的立場にあったスペイン帝国の評判は、「黒の伝説」一色に塗り潰され、一八世紀の啓蒙の知恵者たち（寛容と理性の使途たち）にとつて、宗教的信条を断乎固守しながら衰退していく国として、彼らの啓蒙の対象となったのである。⁶⁾

一八一〇年から一八二五年に起こったスペイン領アメリカのスペインに対する反乱は、母なるスペインの残虐性、圧制、反啓蒙に対するものであった。新大陸生まれのスペイン人（クリオージョ）とイベリア半島のスペイン人との間に見られる敵意は、新世界資源の開発を、国王の法令と官僚の規制に逆らっても何とか管理したいとするクリオージョの願望に根ざしていた。ただし、クリオージョすなわちアメリカ「白人」は、新大陸においては小教派にすぎなかった。反スペイン的偏見は、一九世紀から二〇世紀のスペイン領新大陸における宗教、政治、教育上の問題点をめぐる衝突において、自由主義の指標となった。非イスパニア化が庶民の信条となつて、一九世紀末におけるインディオヘニスモ（インディオ擁護運動）と密接に結びついたのである。

ヨーロッパにおいて形成されたイスパノフォビアは、ふたつの経路を辿つて合衆国に伝えられ、定着した。ひとつは、北アメリカに植民地を建設したイギリス人によつて、もうひとつは、メキシコ経路によつてである。反スペイン感情は、一九一〇年のメキシコ革命において増幅され、後にインディオヘニスモと連動して教条的イスパノフォビアとなり、やがては反ホワイト感情にまで拡

張されることになった。その結果、合衆国においては、アングロ系アメリカ人とメキシコ系アメリカ人との間に深い亀裂が生じ、文化・政治的抗争が生みだされることになったのである。

第三部 「伝説」の反響

アメリカ合衆国における今日の学校教育において、イスパニア文化に関する教育ほど歪められたものはない、とパウエル氏は述べる。例えば一九五八年に著された『アメリカ歴史地図』に掲載されている「植民地初期の経済的基盤」図には、フランスに関しては「毛皮、漁撈、封建的農業」、イギリスに関しては「漁撈、営利農業、ならびに自給農業」、スペインに関しては「鉱業、牛の飼育、奴隸支配」と記されている。幾分改善されつつあるとはいえ、政治的、宗教的、あるいは人種の偏見は未だに存在しつづけているのである。全イスパニア世界に関する合衆国のもつ誤解、歪曲、無知は、単に教育に対してだけでなく、合衆国が外交を行いその機能を發揮させるのにも有害な影響を及ぼしていることを認識しなければならぬ。パウエル氏は、「優秀な文明が劣等の文明を取り締まるのだ」というルーズヴェルトの觀念が、ラテン・アメリカ諸国に反米感情をもたらしたことを指摘している。それは、カリブ海域のラテン・アメリカ問題への直接・間接の介入の結果芽生えた大衆的反米感情であり、合衆国がラテン・アメリカ諸国にとつてのスペインと同じ立場におかれたのである。この状況は、現代にまで続いてきている。今やイベリア、ラテン・アメリカ、

合衆国の三角同盟が必要であり、そのためには、長いこと黒の伝説的考え方に左右されてきたことで育まれた単純さや幼稚さを、早急に全面的に清算するのが至上命令だというのが本書の主張である。

おわりに——パウエル論とハンチントン論——

パウエル氏は、本書において、ヨーロッパの一部であるスペインがいかにして非ヨーロッパというレッテルを貼られるようになったのか、反スペイン感情がいかにして今日の西欧文明社会の中に影を落としているかを、歴史を遡って詳細に示した。氏によれば、キリスト教・ヨーロッパ文明をイスラム教徒から防衛し続けたスペインに対する「憎悪」の種子は、スペインが帝国として絶大な権力を掌握し始めたころ、周辺の各国で発芽したのだと言う。やがて反スペイン感情は大きな「憎悪の樹」となつて深く根を張り、スペインを帝国の座から引き摺り降ろすに至つたのである。パウエル氏が最も危惧したのは、ヒスパニック世界が西欧文明の一員であるということを、頑に拒否しつづけている現在の西欧のあり方である。残念ながら現在に至るまで、この認識は改善されていないように思われる。氏の指摘する通り、ヨーロッパおよびアメリカの歴史教育において、スペイン人がいかに残酷で、狡猾で、貪欲な「人種」かといつたことが語り続けられる限り、この問題は解決しないであらう。

冒頭に挙げたハンチントン氏は、「文明の衝突」という仮説の前提を示した中で、次のように述べている。「異なる文明をもつ集団間の紛争がより頻繁に発生するようになり、その対立は、同じ文明間の集団によるものよりも、さらに深刻で、暴力的なものになる可能性が高いこと。そして、世界政治の基軸が、「西欧対その他」という図式で導かれる可能性が高いことである」と。確かに、異なる文明をもつ集団間の紛争としての西欧対その他という対立構造が生まれる可能性は考えなくてはならない。その一方で、実は同じ文明の中で起こった集団間の衝突は、同じように、あるいはそれ以上に根深い「憎悪の樹」を生み出す可能性があることを、過去のヨーロッパの歴史に鑑みて、忘れるべきではないのである。

現代文明は、異なった思考形態やシステム——すなわち異なった文化や文明——に橋を架けようとしてきた。換言すれば、異なった文明を同化しようとする傾向が、現代文明そのものの中に存在しており、橋を架けること自体がその存在意義であると言ってもよいかもしれない。現代の世界秩序はこうして形成されてきたのである。ハンチントン氏の懸念する異文明間で起こる衝突の可能性は、このような、いわば地球規模での同化作用の中で常に問題とされてきたのであり、それ故衝突を回避しようとするメカニズムは、現代文明の成長過程において、不十分であったとしても、現実の政治・外交の中で形作られてきたと考えるべきではないだろうか。⁽⁸⁾しかし、あらゆる文明を同化しようとする傾向と、そのために衝突を回避しようとするメカニズムとは裏腹に、同一の地

域文明内部には、これを分断しようとする「裂け目」が潜んでいる。このことをパウエル氏は指摘しているのである。世界的な同化を目指す現代文明には、スペインを非ヨーロッパにしようとするような、本来同一であるべきものを異化しようとする作用を制御する機能が欠落しているのかもしれない。この、内部的な異化作用こそが現代文明を崩壊に導く力となりうることを、パウエル氏はスペインを例にとつて示そうとしたのだと思われる。氏の議論は、文明間とともに文明内部にも多くの問題を抱えた現代に生きる我々にとつて、まさに傾聴に値するものなのである。

註

(1) サミュエル・ハンチントン著、竹下興喜監訳「文明の衝突」、『中央公論』八月号、三四九〜三七四頁、中央公論社、一九九三年。

(2) ハンチントン氏は「文明の衝突」の中で、冷戦終結後の新時代においては、イデオロギーや経済を巡る対立によってではなく、文化的な要素によって紛争が引き起こされるだろうと予測している。つまり、「君主、国民国家、イデオロギーによる紛争のすべては西欧文明諸国によるものであり……これは西欧の内戦だった」と考えるのである。そして、「冷戦の終結とともに、国際政治は西欧という枠組みを超えた広がりを見せ、問題の中枢は西欧文明対非西欧文明という構図によって規定されるようになった」(三三〇頁)と言う。「引き裂かれた」非西欧諸国は、国家の特定部分を西欧化しようとする試みるだろうが、多くの場合、その実現には障害がともなうこ

とになろう。今後、当面の間、紛争の中核は、西欧対イスラム・儒教諸国という構図で展開するであろう」(三七三頁)と述べている。

(3) ラス・カサス著、染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波書店、一九七六年。ラス・カサスは、一四七四年セビーリヤに生まれ、一五〇二年、ニコラス・デオパンドのエスパニョーラ島遠征に参加し、インディオのキリスト教化に従事した。一五一〇年にエスパニョーラ島の司教に任命された当時のラス・カサスは、他のスペイン人同様、インディオは改宗されるべき存在であると考えていた。一五一四年、ラス・カサスは自ら所有していたインディオの開放を公けにし、エンコミエンダ制の撤廃こそがインディオの惨状を救う唯一の策であると考えようになった。一五一五年以降、フェルナンド王および、新王カルロス一世に対し、インディオの救済を訴え続けるようになる。彼の構想は、エンコミエンダ制を廃止し、インディオとスペイン人による共同体を作ることであり、当時トレドの大司教であったフランシスコ・ヒメネス・デ・シスネーロスの命によって「インディオ保護官」に任命された。一五一八年、アリストテレスの自然奴隷説をうけてインディオを自然奴隷だと主張するフランシスコ会士フワン・デ・ケペードとの論争が始まる。一五二〇年、クマナーにおける平和的植民計画が失敗に終わったことから、サント・ドミンゴのドミニコ会修道院へ身をよせ、一五二二年、ドミニコ会士となった。一五四〇年、ラス・カサスは、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』を著し、一五四二年には彼の進言が実を結び、エンコミエンダ

制の暫時的撤廃、インディオの奴隷化の禁止を示す「新法」が制定された。以後、「新法」とインディオに対するスペイン支配の正当性を主張する印刷物の印刷を巡って、フワン・ヒネス・デ・セブルベダとの論争が繰り返されたことは、本書『憎悪の樹』に詳しく述べられている。その後一五六六年に没するまで、ラス・カサスはさまざまな著作によって国王およびインディアス枢機会議に対し、インディオとスペイン人との関わり方を訴え続けたのである(ラス・カサスについては、同書一九一―二〇五頁の他、増田義郎著、バルトロメ・デ・ラス・カサスの『インディアス史』、長南実訳、増田義郎注『インディアス史』五(大航海時代叢書第II期25)岩波書店、一九九二年、七九三―八〇二頁を参照した)。

(4) マラーノ(Marano)とは「豚／卑しい者」という意味で、スペイン、ポルトガルにおいて強制的にカトリックへ改宗させられたユダヤ人を指す蔑称である。

(5) 『簡潔な報告』におけるラス・カサスのインディオ観とスペイン人観を示すために、ここに一例を挙げておく。ラス・カサスは、インディオについて以下のように述べている。「粗衣粗食に甘んじ、ほかの人びとのように財産を所有しておらず、また、所有しようとも思っていない。したがって、彼らが贅沢になったり、野心や欲望を抱いたりすることは決してない。…彼らは明晰で物にとらわれない鋭い理解力具备え、あらゆる秀れた教えを理解し、守ることができる」(一八―一九頁)。一方、スペイン人の残酷ぶりについては次のような記録がある。「…ある村のインディオ、二〇〇人以上のインディオの鼻から口髭まで唇もろとも削ぎ落し、のっぺらぼうにし

た」(一三四頁)のであり、これがあたかも伝導士が行った奇跡であるかのように他のインディオたちに示したと言う。また、「この四〇年間にキリスト教徒たちの暴虐的で極悪無慚な所業のために男女、子供合わせて二二〇〇万人以上の人が残酷非道にも殺されたのはまったく確かなことである」(二一頁)と記述している。

(6) 同じように、各国語に翻訳された新大陸関係の著作の中に、エル・インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ペーガの『インカ皇統記』があることを忘れてはならない。パウエル氏は、「スペイン人の父、インカ人の母の間にペルーで生まれたガルシラーソ・インカ・デ・ラ・ペーガは、スペインにあってペン一筋に文学における不滅の途を歩んでいた。インカ人とスペイン人のペルー征服を主題にした名高い数々の作品をもつて。」(一六五〜一六六頁)としか触れていない。だが、『インカ皇統記』は、インカ王族の血をひくガルシラーソが、スペインに滅ぼされたインカ帝国を賛美したものであり、ヨーロッパにおけるユートピア思想の流布に大きな役割を果たしたのであった。この著作の翻訳も、インカ帝国を滅ぼしたスペインに対する憎悪の感情を増幅させるのに役立てられたと考えてもよいだろう。

(7) ハンチントン、前掲書、三七三頁。

(8) このような視点は、ハンチントン氏の言う「西欧文明対非西欧(特にイスラム・儒教)文明」という対立構造に対するリチャード・アーミテージ氏の反論の中にも明確に表れていると言えるだろう。アーミテージ氏は、「文明の衝突は不可避か」と題した論文(木村英雄訳、『中央公論』二月号、一一

五〜一二六頁、中央公論社、一九九四年)の中で、次のように反駁している。「ハンチントン教授はこうも言っている。民主主義と共産主義の間の争いが終結したあと、人々は「信仰と家族、血と信念」のため「命をかけて戦う」だろう。しかし冷戦終結後最初の重大な国際紛争であった一九九一年の湾岸戦争において、シリア、エジプト、サウジアラビア、クウェート、その他の湾岸協力会議構成国の軍隊は、アメリカやヨーロッパの軍隊と肩を並べて、アラブ世界最大の陸軍と戦ったのである。彼らに共通の行動を取らせ連帯感を生み出したのは、人種や肌の色、宗教ではなく、もつと現実的な国益の確保という共通の目標であった。」(一一七〜一一八頁)と。また、イスラム・儒教文明が西欧文明の敵であるというハンチントン氏の見解は間違っていると主張する。近年西欧文明社会において頻発するイスラム系テロリストによるさまざまな事件は、「テロリスト」による犯罪であつて、イスラム教徒自体が西欧文明を脅かそうとしているのではないと考えるべきだと言っているのである。そして、多様性を受け入れる西欧世界の能力を評価すべきであり、非西欧文明諸国のもつ価値観が西欧文明のそれと異なるのは、今に始まったことではないと指摘している。合衆国内に住むアフリカ系、ラテン・アメリカ系アメリカ人が、彼らの祖先の足跡や伝統をより重視するようになってきたことが、すなわち内戦に結びつくなどと考えるべきではないこと、西欧の古典文明がいかにイスラム文明に大きな影響を与え、またイスラムがルネッサンスの勃興にどれだけ貢献したかを思いだすべきだと言う。異なった文明間の交流から得られる利益は、その害悪をはるかに凌駕す

ると、アーミテージ氏は述べるのである。